

## [31] トーゴ

### 1. トーゴの概要と開発課題

#### (1) 概要

(イ) 1967 年のクーデターでエヤデマ大統領が権力を掌握して以来、西アフリカで最も安定していた国の一つに数えられていた。1990 年以降民主化の動きが高まり、1991 年 8 月には国政上の実権がエヤデマ大統領から暫定政府のコフィゴー首相に移管されたが、同大統領を支持する軍の一部が首相襲撃未遂事件を起こす等、民主化プロセスの妨害が続いた。その後、1994 年 2 月の国民議会選挙の結果、野党側が過半数の議席を押さえ、野党第二党のコジョー氏が首相に指名され、民主化への歩みが再度始まった。1998 年 6 月、大統領選挙が実施されエヤデマ大統領は再選されたが、野党側は投票結果に操作があったとして抗議を行い、1999 年 3 月に行われた国民議会選挙では全野党が選挙をボイコットするなど与野党間の政治的緊張が急速に高まった。こうした内政の緊張状況に対し、フランス、ドイツ、EU、仏語圏の代表が仲介にあたり、1999 年 7 月、与野党間合意が署名され、エヤデマ大統領は国民議会選挙の再実施と 2003 年の任期満了に伴い政権を降りることを約束したが、2002 年 12 月、同大統領は再選を可能とするよう憲法を改定し、2003 年 6 月の大統領選挙に立候補し再選された。2002 年 3 月の国民議会選挙は、内政の混乱から延期された。

(ロ) 2005 年 2 月、38 年間事実上の独裁政権を継続していたエヤデマ大統領が逝去し、その後、憲法上の手続に反する形で同大統領の子息であるフォール・ニヤシンベ氏が大統領に任命された。これに対し野党側や ECOWAS、AU 等の国際社会は憲法を尊重した権力の移行を速やかに実施するよう強く求めたため、同年 4 月、トーゴ政府により憲法にのっとり大統領選挙を実施したところ、与党のフォール・ニヤシンベ候補が全投票数の 60% を獲得し、大統領に選出された。しかし、この開票結果が不正であることを理由に野党支持者が警備隊と衝突し、多数の死傷者が生ずる事態に発展、その後約 3 万人以上の野党系市民が弾圧を恐れ、隣国のベナン及びガーナへ避難した。同年 6 月、ニヤシンベ新大統領は、穏健派野党のコジョー首相他 15 名の野党系大臣を入閣させた国民和解内閣を樹立し、国民の和解合意に努めた。2006 年 8 月、コンパオレ・ブルキナファソ大統領の仲介により、政府、主要政党及び市民社会各代表が政治的合意に達し、同年 9 月にアボイボ首相が内閣を発足した。2007 年 10 月に国民議会議員の任期満了による国民議会議員選挙が行なわれ、同年 12 月にコムラン・マリー首相内閣が樹立した。

(ハ) 外交面では、従来よりトーゴは穏健な非同盟中立路線を基調として、フランス・ドイツ・アメリカ合衆国等西側諸国との関係を重視してきている。政府は国際社会からの積極的な開発支援を強く希望しているものの、93 年 1 月の反政府勢力・民主派への弾圧以降、主要援助国は本格的な援助を控えてきた。しかし、2007 年 10 月の国民議会選挙が平和裡に実施されたことを受け、フランス、ドイツ、EU 等をはじめとする主要援助国・国際機関は援助活動を本格化しつつある。

(二) アフリカ域内では、積極的に紛争の平和的解決に努力してきており、リビア・チャド関係の正常化、モーリタニア・セネガル間の紛争調停、ナイジェリア・カメリーン国境紛争にも関与している。1999 年に ECOWAS 議長国としてギニア・ビサウ紛争、シェラレオネ紛争の仲介の役割を積極的に果たしている。

(ホ) トーゴ経済は、燐鉱石、綿花、コーヒー、カカオの輸出が重要な位置を占めており、1970 年代に一次產品の国際価格の上昇に伴い高度成長を遂げたが、1980 年をピークにこれら一次產品価格は下落の一途をたどり、あわせて 1990 年代後半からの政治的混乱も加わり同国経済は悪化していった。その後政治的混乱が 1993 年後半に沈静化し一時は回復基調に向かったが、1998 年に約 8 ヶ月間に及んだエネルギー危機（電力不足）及び同年 6 月の大統領選挙以降の政治的危機の発生に伴い、経済停滞が続いた。しかしながら 2007 年 10 月の国民議会選挙の実施に伴い、主要援助国・国際機関が本格的に援助を開始したことから、今後の同国経済の発展が期待されている。

#### (2) PRSP

トーゴ政府は、現地世界銀行事務所等の協力を得つつ PRSP につき検討作業を行っているが、いまだ正式な策定には至っていない。

## トーゴ

表-1 主要経済指標等

指 標		2006年	1990年
人 口	(百万人)	6.4	4.0
出生時の平均余命	(年)	58	58
G N I	総 額 (百万ドル)	2,180.94	1,597.95
	一人あたり (ドル)	350	380
経済成長率	(%)	4.1	-0.2
経常収支	(百万ドル)	—	-84.25
失 業 率	(%)	—	—
対外債務残高	(百万ドル)	1,805.79	1,280.56
貿 易 額 <sup>注1)</sup>	輸 出 (百万ドル)	—	662.91
	輸 入 (百万ドル)	—	846.82
	貿易収支 (百万ドル)	—	-183.92
政府予算規模 (歳入)	(百万CFAフラン)	204,139.5	—
財政収支	(百万CFAフラン)	-812.7	—
債務返済比率 (DSR)	(対GNI比, %)	0.7	5.4
財政収支	(対GDP比, %)	-0.1	—
債務	(対GNI比, %)	68.5	—
債務残高	(対輸出比, %)	142.5	—
教育への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
保健医療への公的支出割合	(対GDP比, %)	—	—
軍事支出割合	(対GDP比, %)	—	3.1
援助受取総額	(支出純額百万ドル)	78.67	258.24
面 積	(1000km <sup>2</sup> ) <sup>注2)</sup>	57	
分 類	D A C	後発開発途上国 (LDC)	
	世界銀行等	i /低所得国	
貧困削減戦略文書 (PRSP) 策定状況		暫定版PRSP策定済み (2008年5月) /HIPC	
その他の重要な開発計画等		—	

注) 1. 貿易額は、輸出入いずれもFOB価格。

2. 面積については“Surface Area”的値（湖沼等を含む）を示している。

表-2 我が国との関係

指 標		2007年	1990年
貿易額	対日輸出 (百万円)	5.97	82.22
	対日輸入 (百万円)	2,631.48	3,744.32
	対日収支 (百万円)	-2,625.51	-3,662.10
我が国による直接投資 (百万ドル)		—	—
進出日本企業数		—	—
トーゴに在留する日本人数 (人)		—	8
日本に在留するトーゴ人数 (人)		18	4

表-3 主要開発指標

開発指標		最新年	1990年
極度の貧困の削減と飢餓の撲滅	所得が1日1ドル未満の人口割合 (%)	—	斜線
	下位20%の人口の所得又は消費割合 (%)	—	斜線
	5歳未満児栄養失調割合 (%)	25(1996-2005年)	斜線
初等教育の完全普及の達成	成人(15歳以上)識字率 (%)	53.2(1995-2005年)	—
	初等教育就学率 (%)	78(2004年)	64(1991年)
ジェンダーの平等の推進と女性の地位の向上	女子生徒の男子生徒に対する比率(初等教育)	0.86(2005年)	斜線
	女性識字率の男性に対する比率(15~24歳) (%)	63.6(2005年)	斜線
乳幼児死亡率の削減	乳児死亡率 (出生1000件あたり)	78(2005年)	128(1970年)
	5歳未満児死亡率 (出生1000件あたり)	139(2005年)	216(1970年)
妊産婦の健康改善	妊産婦死亡率 (出生10万件あたり)	510(2005年)	斜線
HIV/エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延防止	成人(15~49歳)のエイズ感染率 <sup>(注)</sup> (%)	3.2 [1.9-4.7](2005年)	斜線
	結核患者数 (10万人あたり)	753(2005年)	斜線
	マラリア患者数 (10万人あたり)	7,701(1998年)	斜線
環境の持続可能性の確保	改善された水源を継続して利用できる人口 (%)	52(2004年)	50
	改善された衛生設備を継続して利用できる人口 (%)	35(2004年)	37
開発のためのグローバルパートナーシップの推進	債務元利支払金総額割合 (財・サービスの輸出と海外純所得に占める%)	0.8(2005年)	5.3
人間開発指数(HDI)		0.512(2005年)	0.496

注) [ ]内は範囲推計値。

## 2. トーゴに対するODAの考え方

### (1) トーゴに対するODAの意義

我が国は、これまで無償資金協力及び保健医療・工業分野等での研修員受入等の技術協力を中心に援助を実施してきている。無償資金協力については、食糧援助、食糧増産援助(現貧困農民支援)、水供給等のBHNを中心に実施してきている。またトーゴの構造調整努力を支援するため、これまで合計約93億円の円借款と合計17億円のノン・プロジェクト無償資金協力を供与してきている。

1993年1月以降、反政府勢力・民主派への弾圧が多く見られたため、主要援助国は原則として援助を停止し、我が国も事実上援助を停止していた。その後、民主化プロセスの再開により、1996年8月我が国は、ODA大綱、国内情勢の安定化等を総合的に勘案し援助を再開した。今後の援助の実施については、同国の政治的安定性及び援助受入能力を見極めつつBHNを中心に検討していく。

### (2) トーゴに対するODAの基本方針・重点分野

トーゴの政情及び民主化の進捗を見守りながら、中長期的には貧困削減に寄与するものとして保健、水供給及び教育分野への支援を行っていくこととし、短期的には研修生の受入を通じた技術協力と共に、無償資金協力では直接貧困層が裨益対象となる食糧援助又は貧困農民支援を実施していく。

また、2007年10月の国民議会選挙を受けたマリー内閣樹立後、同国政治情勢も平和理に進展しているため、BHNまたは農業分野での草の根・人間の安全保障無償資金協力も検討していく。

## 3. トーゴに対する2007年度ODA実績

### (1) 総論

2007年度のトーゴに対する技術協力は0.20億円(JICA経費実績ベース)であった。2007年度までの援助実績は、円借款93.46億円、債務免除17.90億円、無償資金協力132.75億円(以上、交換公文ベース)、技術協力7.97億円(JICA経費実績ベース)である。

### (2) 技術協力

2007年度は、人的資源、行政、農業、社会基盤等の分野で17名の研修員受入を実施した。

## 4. 留意点

2008年8月現在、トーゴは我が国とクールアース・パートナーシップを構築している。

表-4 我が国の年度別・援助形態別実績（円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース）

(単位：億円)

年 度	円 借 款	無償資金協力	技 術 協 力
2003年	—	0.09	0.34 (0.34)
2004年	(17.90)	0.09	0.44 (0.41)
2005年	—	0.51	0.21 (0.18)
2006年	—	—	0.23 (0.19)
2007年	—	—	0.20
累 計	93.46	132.75	7.97

注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。

2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。草の根・人間の安全保障無償資金協力と日本NGO連携無償資金協力、草の根文化無償資金協力に関しては贈与契約に基づく。

3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。また、( ) 内の数値は債務免除額。

4. 2003～2006年度の技術協力においては、日本全体の技術協力事業の実績であり、2003～2006年度の( ) 内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2007年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。

表-5 我が国の対トーゴ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦 年	政府貸付等	無償資金協力	技 術 協 力	合 計
2003年	—	0.03	0.30	0.34
2004年	-1.69	2.13	0.33	0.77
2005年	-1.11	1.57	0.29	0.76
2006年	-1.05	1.34	0.14	0.44
2007年	-1.04	1.16	0.33	0.46
累 計	64.21	102.03	7.45	173.74

出典) OECD/DAC

注) 1. 政府貸付等及び無償資金協力はこれまでに交換公文で決定した約束額のうち当該暦年中に実際に供与された金額(政府貸付等については、トーゴ側の返済金額を差し引いた金額)。

2. 技術協力は、JICAによるものほか、関係省庁及び地方自治体による技術協力を含む。

3. 四捨五入の関係上、合計が一致しないことがある。

4. 政府貸付等の累計は、為替レートの変動によりマイナスになることがある。

表-6 諸外国の対トーゴ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	うち日本	合 計					
2002年	フランス	18.68	ドイツ	8.05	米国	6.65	ベルギー	1.36	カナダ	1.01	0.34	39.24
2003年	フランス	21.20	ドイツ	11.81	米国	5.50	カナダ	1.81	オランダ	1.48	0.34	46.26
2004年	フランス	26.51	ドイツ	9.70	カナダ	5.96	米国	3.55	オランダ	1.19	0.77	52.34
2005年	フランス	30.53	ドイツ	8.35	オランダ	5.32	カナダ	3.26	米国	2.98	0.76	59.44
2006年	フランス	33.34	ドイツ	8.02	米国	2.04	カナダ	2.00	ベルギー	1.86	0.44	54.75

出典) OECD/DAC

表-7 国際機関の対トーゴ経済協力実績

(支出純額ベース、単位：百万ドル)

暦年	1位	2位	3位	4位	5位	その他の	合計					
2002年	IDA	6.81	CEC	3.65	UNTA	1.66	UNDP	1.62	UNICEF	1.58	-6.33	8.99
2003年	CEC	4.57	GFATM	3.54	UNDP	2.73	UNICEF	1.73	UNTA	1.67	-12.36	1.88
2004年	GFATM	7.53	CEC	5.25	UNDP	2.07	UNTA	1.76	UNICEF	1.61	-6.21	12.01
2005年	GFATM	10.86	CEC	8.16	UNTA	2.11	UNICEF	1.72	UNDP	1.65	-1.31	23.19
2006年	CEC	10.37	GFATM	8.37	UNDP	5.10	UNICEF	2.21	UNTA	1.11	-3.30	23.86

出典) OECD/DAC

注) 順位は主要な国際機関についてのものを示している。

表-8 我が国の年度別・形態別実績詳細（円借款・無償資金協力年度E/Nベース、技術協力年度経費ベース）

(単位：億円)

年度	円借款	無償資金協力	技術協力
2002年度までの累計	93.46億円 内訳は、2007年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html)	132.06億円 内訳は、2007年版の国別データブック、もしくはホームページ参照 (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/jisseki.html)	6.65億円 研修員受入 172人 専門家派遣 7人 調査団派遣 68人 機材供与 5.66百万円
2003年	なし	0.09億円 草の根・人間の安全保障無償(1件)(0.09)	0.34億円 (0.34億円) 研修員受入 18人 (18人)
2004年	債務免除 (17.90)	0.09億円 草の根・人間の安全保障無償(1件)(0.09)	0.44億円 (0.41億円) 研修員受入 26人 (24人) 留学生受入 1人
2005年	なし	0.51億円 (0.51) 日本NGO支援無償(1件)	0.21億円 (0.18億円) 研修員受入 19人 (18人) 留学生受入 1人
2006年	なし	なし	0.23億円 (0.19億円) 研修員受入 12人 (11人)
2007年	なし	なし	0.20億円 研修員受入 17人
2007年度までの累計	93.46億円	132.75億円	7.97億円 研修員受入 260人 専門家派遣 7人 調査団派遣 68人 機材供与 5.66百万円

注) 1. 年度の区分は、円借款及び無償資金協力は原則として交換公文ベース、技術協力は予算年度による。

2. 「金額」は、円借款及び無償資金協力は交換公文ベース、技術協力はJICA経費実績及び各府省庁・各都道府県等の技術協力経費実績ベースによる。草の根・人間の安全保障無償資金協力と日本NGO連携無償資金協力、草の根文化無償資金協力に関しては贈与契約に基づく。

3. 円借款の累計は債務繰延・債務免除を除く。

4. 2003～2006年度の技術協力においては、日本全体の技術協力の実績であり、2003～2006年度の( )内はJICAが実施している技術協力事業の実績。なお、2007年度の日本全体の実績については集計中であるため、JICA実績のみを示し、累計についてはJICAが実施している技術協力事業の実績の累計となっている。

5. 調査団派遣にはプロジェクトファインディング調査、評価調査、基礎調査研究、委託調査等の各種調査・研究を含む。

6. 四捨五入の関係上、累計が一致しないことがある。

## プロジェクト所在図

## ガーナ、トーゴ、ベナン

